

---

# 若者に奉仕する組織内での 子供への性的虐待の防止について： その方針と手順への着手

米国厚生省  
疾病管理予防センター(CDCP)  
国立負傷予防管理センター  
暴力予防課  
ジョージア州アトランタ

2007 年

## 第 2 項： 個人間の相互交流に関する指針

### ゴール：

若者と職員／ボランティアとの相互交流や、若者同士の相互交流における若者の安全を確保すること。

### 一般的原則

個人間の相互交流における指針は、組織の使命および活動に基づいて決定されるべきである。例えば、成人と若者の間の一対一の活動を推進する組織の場合、集団活動を中心とするプログラムとは異なる相互交流の指針が必要となるかもしれない。

組織は事態が発生する前に相互交流の方針を確立すべきである。以下に挙げる戦略は、若者および職員／ボランティアの発達年齢と成熟度に応じて調整されるべきである。戦略はまた、組織が奉仕する層の文化的背景を考慮すべきである。この項において、「成人」とは、監督する立場にあるあらゆる個人を指し、若者も含まれる。

### 肯定的な相互交流と否定的な相互交流のバランスを取る

- 肯定的かつ適切な相互交流を推進することと、不適切で有害な相互交流をしないよう注意することの間にバランスを取る必要がある。
- こうしたバランスに留意しながら、若者が性的虐待や被害を受けるリスクがない状態でプログラムから恩恵を受けることを確実にする戦略を採用する。

### 個人間の相互交流に関する指針のための重要な戦略

#### 適切／不適切／有害な言動

若者間および職員／ボランティアと若者の間における適切で肯定的な相互交流は、若者の前向きな発達を支え、若者が自分の価値を感じ、若者を保護する要素として機能する思いやりのある結びつきを提供する上で重要である。逆に、不適切あるいは有害な相互交流は、若者を身体的・心理的に有害な結果を受けるリスクに陥れる。組織は、適切、不適切、有害に分類される言動を特定すべきである。これらの分類分けは、組織の行動あるいは倫理規範として明確に示すことができる。適切な相互交流による恩恵と不適切な相互交流に伴うリスクのバランスを慎重に図る。適切／不適切／有害な言動の例については 10 ページを参照のこと。

#### 職員／ボランティアと若者の人数比

職員／ボランティアと若者の人数比を設定する目的は、若者の安全を確実にすることである。あらゆる状況に対応できる標準的な割合はない。人数比を決定する際には、次のような文脈上の変数を考慮する。

- 若者と職員／ボランティアの年齢と発達レベル。もし若者あるいは職員／ボランティアが若年の場合、人数比を低くする、つまり成人一人に対する若者の数を少なくする必要があるかもしれない。
- 活動のリスク。他者から隔離される可能性が極めて高いものか？
- 活動の場所。場所は、監視しやすい教室か？ あるいは個人を見失いやすい公園か？

職員／ボランティアには、適切な監督および監視を維持できるよう、若者と積極的に相互交流するよう奨励する。職員／ボランティアと若者の間で申し分のない人数比を設定していても、すべての職員／ボランティアが部屋の片隅で自分たちの会話に没頭していたら、若者は監視されない。

## 若者に奉仕する組織の適切／不適切／有害な言動の例

時には、その言動が適切なのか不適切なのか有害なのか明確でないこともある。たとえば、キスなどの親密な接触は年長の若者にとっては発達面においては適切かもしれないが、組織の活動内容によっては不適切かもしれない。そのキスが強制的なものであれば、有害にもなり得る。その他の例としては、ハグ(抱擁)を伴うものが挙げられる。抱擁は、ある状況では適切かつ肯定的かもしれないが、子供が受容的でない場合や職員／ボランティアが過度に頻繁に、あるいは過度に長時間抱擁している場合、あるいは接触がロマンチックなものとして行われたり性的な親密性を伴う場合は、不適切にもなり得る。

### 口頭によるコミュニケーション

適切:

- 称賛する
- 良い活動や言動を肯定的に増強、増援する

不適切／有害:

- 性的な挑発あるいは下品な発言
- (性的に)きわどいジョーク

### 行動

適切:

- 背中や肩をポンとたたく

不適切／有害:

- 臀部をポンとたたく
- 過度に親密／ロマンチック／性的な接触
- 体罰
- 性的な写真を見せる、あるいは性的な写真の行動に若者を関与させる

### 一対一の相互交流

一部の組織は、若者と成人の間で一対一の相互交流を制限する方針を採用している(若者という時は常に少なくとも二人の成人がいる、など)。こうした方針のゴールは、一人の成人と一人の若者が隔離される(子供の性的虐待リスクが高まる状況)のを防ぐことである。この戦略は、組織の使命に基づき調整されなくてはならない。

- 可能な場合は、若者という時は常に少なくとも二人の成人がいるようにし、一対一の相互交流を制限する。
- この方針について、次の3つの中から一つを選ぶ。
  - これを常に強制的な必須方針とする。
  - 一泊旅行など、活動あるいは状況のリスクに応じた方針とする。
  - 組織の使命に基づき、職員／ボランティアと若者の間で一対一の時間を持つ必要がある場合(メンタリング・プログラムなど)、監督を強化するか若者と職員／ボランティアの接触を増やし、より厳重な審査を行うなど他の保護措置を維持する。



### 若者間の相互交流のリスク

組織は、職員／ボランティアと若者間の相互交流を監視することに加え、若者間の相互交流に対処する必要がある。職員／ボランティアと若者間の相互交流に焦点を当てた多くの戦略は、若者間の相互交流に対処する形に調整できる。

- 監督下でない若者が性的あるいは身体的に他の若者を虐待する可能性があるあらゆる状況に対応する。例えば、子供の性的虐待のリスクのために更衣室に成人がいることを禁止する方針を採用している組織の場合、監督下でない若者が他の若者を性的あるいは身体的に虐待する可能性がある状況につながるかもしれない。可能性のある解決策としては常に二人以上の成人がその場にいるよう義務付ける方針を採用することである。
- いじめや性的虐待に対応する方針を開発することで、前向きな相互交流を推進できると同時に、一部の相互交流は不適切あるいは有害であると認める。

### 特定の活動の禁止および制限

しごきや秘密の儀式、一泊旅行、入浴、着替え、トイレでの相互交流、および夜間の活動は子供の性的虐待により大きなリスクを呈する。こうした活動の禁止あるいは制限は、組織の内容に基づくところが大きい。例えば、外泊を伴うキャンプの場合、一泊旅行や入浴を禁止することはできない。

### プログラム外での接触の制限

プログラム外での接触の制限には2種類ある。一つはプログラムの内容と関係のない所で若者と職員／ボランティアが接触するものである。組織は、職員／ボランティアと若者の接触は組織が定める活動及びプログラムや特定の場所(組織の建物内の活動など)に制限すべきである。



二つ目は、若者があなたの組織の活動下にある際に、組織と関係のない人と接触することである。

- 建物を入退室するすべての若者と成人を管理するシステムを開発する。システムには、入退室の際に署名を必要とする手続きを含めることもできる。
- 建物の中で自分たちのプログラム以外の活動も行われている場合や、組織の活動が公共の場所(運動場など)で行われる場合、若者と組織と関係ない人との相互交流について具体的な方針を策定する。

### **保護者の情報と許可**

組織は、若者と保護者(両親や後見人など)の住所と連絡先情報を入手すべきである。これらの情報は、決して承認されていない個人に提供されてはならない。組織はまた、若者が特定の活動(遠足や夜遅くの活動、一泊旅行など)に参加することに保護者からの許可を得るべきである。

- 保護者に、彼らの子供／若者がどこで何をするかについて情報を提供する。
- 保護者に、自分の子供がどのような活動あるいは相互交流をすることを受け入れているかについて述べることを認める。



### **若者への責任**

組織は、どのような場合に自分たちが若者に責任を持つのか、どのような場合に保護者が責任を持つのかについて、明確に示すべきである。

- 組織が若者に責任を持ち始める時間とそれが終わる時間について方針を策定する。
- 活動が正式に始まる前と終わった後は、誰が若者に責任を持つのか検討する。
- その方針を文書で保護者と若者に伝える。組織は、保護者がその方針を読み、理解したことを示す署名を要請することができる。

### **その他の戦略の検討**

#### **個人間の相互交流を管理するその他の手法**

若者が職員／ボランティアと隔離されることを防止するペア・システム(二人組を作り互いに注意する)の導入など、相互交流を監視する方法を見つける。

## 第4項： 安全な環境の確保

### ゴール：

若者が性的虐待のリスクが高まった状況に陥らないようにすること。

### 一般的原則

環境的な戦略は組織によって様々であろう。物理的な拠点がある組織（保育所や学校など）、活動のために複数の拠点を持つ組織（スポーツやレクリエーションの組織）、賃貸あるいは不定の空間を使用する組織（メンタリング組織など）によって異なるであろう。環境的なリスクは組織の物理的スペースにかかわらず、検討されるべきである。組織が自分たちのスペースをコントロールしない場合、若者と職員／ボランティアを確実に監視できる代替戦略が使用されるべきである。



### 安全な環境を確実にするための重要戦略

#### 目に見えること

開放的で複数の人の目につきやすいスペースを構築あるいは選択することで、性的虐待行為のリスクがある個人が快適に感じない環境を作り出すことができる。

次の手段を用いて可視性を高めることができる。

- 開放的で目が行き届きやすく、隠匿できる可能性がないスペースを作る
- 建物全体が見渡せるようにする
- プログラムの目的に使用しないエリアは確実に閉め、若者が隔離されないようにする（戸だなや倉庫など）
- ドアには窓ガラスを付ける
- 「ドアは常に開け放しておく」という方針を採用する
- すべてのエリアで明るい照明を導入する

#### トイレ、シャワー、更衣のプライバシー

組織は、トイレやシャワー、更衣といった行為の間のリスクを削減する方針および手順を策定すべきである。職員／ボランティアの性的虐待のリスクだけでなく、若者間の不適切あるいは有害な接触のリスクも考慮する。

#### アクセスのコントロール

組織は常に、誰が現場にいるかを監視すべきである。

- 若者の入室（受付）および退室（引き渡し）に関する方針と手順を作成し、若者の所在を常に把握できるようにする。
- 組織外部のどのような人がどのような状況で入室できるのかを監視する方針と手順を用意する。

### **現地外活動に関する指針**

組織は、現地および現地外の物理的な境界を定め、伝達すべきである。

- 組織は、いつ、どこで、自分たちが奉仕する若者の責任を負うかを決定し、伝える。特にこれは、複数の組織がある施設と遠足において重要である。
- 遠足やその他の現地外活動における状況方針(外部でのトイレ休憩にどのように対応するか、公共交通機関の使い方など)を作成する。

### **輸送に関する方針**

組織は、定期の活動及び特別活動(遠足や一泊旅行など)への若者の送迎は誰の責任となるかを定義すべきである。

次の質問への回答について判断すること。

- 組織が輸送の責任を負うのはいつか？
- 保護者の責任となるのはいつか？
- 若者は職員／ボランティアの車に同乗することはできるのか？回答がイエスであれば、それはどのような状況でか？たとえば、若者は車の中で職員／ボランティアと二人きりになることはできるのか？
- 一日の活動あるいは催しの終了時点の若者の引き渡しに関する手順は？

### **その他の戦略の検討**

#### **属地**

この戦略の目的は、プログラムは団結、統一されており、脅威が入り込む余地はないというメッセージを視覚的に示すものである。この戦略の一例には、看板を使って進路方向を容易に表示したり、スタッフがユニフォームや似たような服を着て存在を明確に示したりすることなどが含まれる。

#### **監視機器(ビデオカメラなど)**

この戦略は、監視機器の背景にはインフラストラクチャあるいはスタッフがあることを暗示する。これらの機器を導入する場合、そうした暗示を支えるインフラを確実に提供すること。